佐久市埋蔵文化財調査報告書　第305集

野馬窪遺跡群

野馬窪遺跡Ⅷ

長野県佐久市猿久保 野馬窪遺跡Ⅷ発掘調査報告書

2024. 3
佐久市教育委員会

例　言

1．本書は、有限会社 中嶋和工務店が行う宅地造成工事に伴う野馬窪遺跡Ⅷの発掘調査報告書である。
2．調 査 原 因 者　　有限会社　中嶋和工務店　代表取締役　中嶋康秀
3．調 査 主 体 者　　佐久市教育委員会
4．遺跡名及び調査面積　　野馬窪遺跡Ⅷ（ＳＮＫⅧ）　215㎡
5．所　　在　　地　　佐久市猿久保字野馬窪181-1
6．調　査　期　間　　令和５年５月16日～６月１日（現場発掘作業）
　　令和５年６月～令和６年３月（報告書作成作業）
7．調 査 担 当 者　　冨沢一明
8．本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1．遺構の略記号は、住居址（H）・土坑（D）・ピット（P）である。
2．挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3．遺構の標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を標高とした。
4．土層の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。
5．挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

第１図　野馬窪遺跡Ⅷ位置図

目　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　１．立地と経過
　２．調査体制
　３．調査日誌
　４．遺構・遺物の概要
　５．標準土層
　６．調査の方法
第Ⅱ章　遺構と遺物
　１．竪穴住居址
　２．土　坑
　３．ピット
第Ⅲ章　調査の総括

発掘調査状況

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1．立地と経過

野馬窪遺跡Ⅷは、佐久市猿久保に所在し、野馬窪遺跡群内の北西よりに位置する。調査地点は湯川により形成された台地上の縁近くに立地する。遺跡周辺の海抜は702m前後を測る。

本遺跡の周辺は、埋蔵文化財発掘調査の実績が多い地域であり、今回の調査地点は８ヶ所目である。周辺遺跡の調査成果としては、14～15世紀の館跡が検出された野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ、古墳時代中期から平安時代の集落跡が発見された野馬窪遺跡Ⅳなどがある。

今回、遺跡群内において有限会社中嶋和工務店により宅地造成の計画がされ、市教育委員会を通し県教育委員会に文化財保護法93条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行い、その結果から遺跡の保護措置がとれない部分で記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。

なお、発掘調査に当たっては開発関係者・地権者・隣接住民の方々に多大なるご理解とご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

2．調査体制

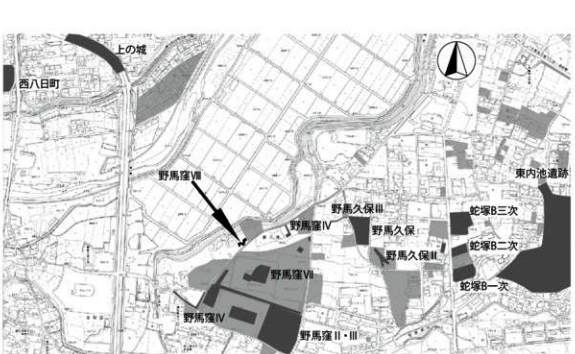
調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	吉岡道明			
事　務　局	社会教育部長	依田　誠				
	文化振興課長	中沢栄二				
	企　画　幹	井上　剛				
	文化財調査係長	山本秀典				
	文化財調査係	小林眞寿	冨沢一明	上原　学	久保浩一郎	松下友樹
	調　査　員	小林妙子	堀篭保子	小池長信	赤羽根　篤	桐原久人
		箕輪由紀	渡辺　学	原　園子	堀篭まゆみ	

3．調査日誌

令和５年３月30日	有限会社中嶋和工務店より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
３月31日	長野県教育委員会へ市教育委員会より４佐教文振第1137-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
４月10日	長野県教育委員会より４教文第７-335号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
５月８日	佐久市教育委員会により試掘・確認調査の実施
５月８日	有限会社中嶋和工務店より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
５月９日	佐久市教育委員会より見積回答
５月９日	有限会社中嶋和工務店と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
５月16日～	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成業務を行う。
令和６年３月	調査報告書を刊行する。 記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

4．遺構・遺物の概要

遺　構	竪穴住居址５軒(古墳３・平安２)		土 坑	４基	
遺　物	土師器	須恵器	陶磁器類	石製品	古銭



第２図　周辺遺跡位置図

５．標準土層

今回の調査地点は南東方向に僅かに傾斜する台地で、基本層序は２層に分かれる。

第Ⅰ層　(10YR4/1)褐灰色土　　耕作土

第Ⅱ層　(10YR6/8)明黄褐色土　浅間火山灰層(P1)

遺構確認面はⅡ層上面である。今回の調査地点ではⅠ層の耕作土下は直ぐに浅間山由来の火山灰層となり、遺構確認面までの土層の堆積はほとんど確認されなかった。

６．調査の方法

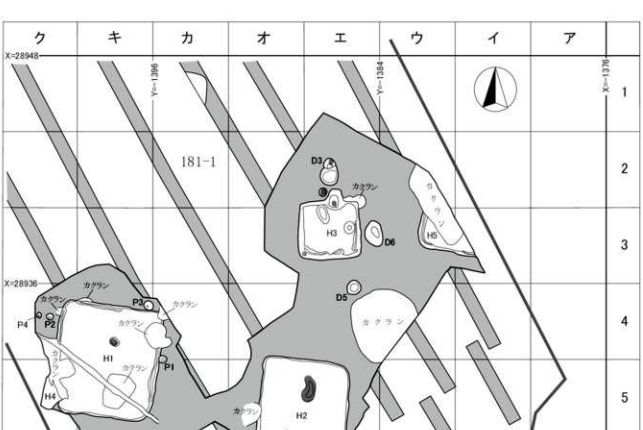
遺構調査・遺構測量

住居址は均等に４分割し、対面する２区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するN_0を付け３次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って２分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構N_0で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインＣを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳と



第３図　調査区全体図（１:200）

して、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は1/20で測量実測した図を1/40で修正し、遺物は1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35㎜一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第Ⅱ章　遺構と遺物

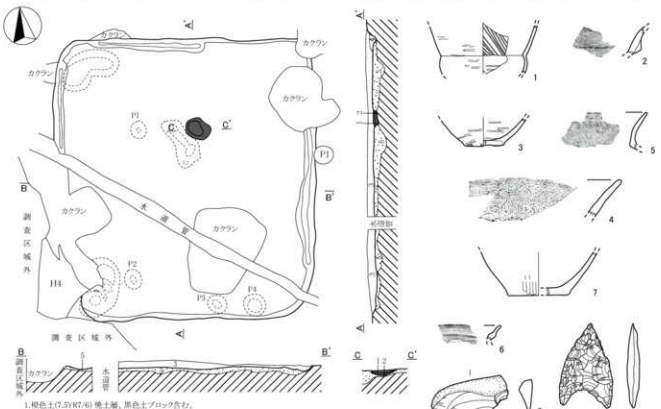
１．竪穴住居址

（１）Ｈ１号住居址

本址はカ・キ・ク-4・5Grに位置する。形態は方形で、規模は南北長5.52m、東西長5.08mで、床面積は推定で27.8㎡を測る。主軸方位はN－10°－Eを測る。壁は緩やかに立ち上がり、壁高さは0.05～0.16mで、北壁と東西壁の一部に壁溝が確認された。床は軟質であった。ピットは４カ所検出され、規模はP1が径0.36m・深さ0.24m、P2が径0.41m・深さ0.29m、P3が径0.41m・深さ0.27m、P4が径0.48m・深さ0.26mを測る。炉は北壁側で検出された。いわゆる「地床炉」で、中央部はよく

焼けていた。

本址からの出土遺物は少なく、９点を図示したのみである。１は小型丸底壺で、口縁部と底部を欠損している。内外面に横方向にミガキを施すが、口縁部内面は放射状のミガキを施す。２はいわゆる「有段口縁壺」の口縁部破片と考えられる。３は小型壺の底部で、僅かに上げ底状になっている。４は櫛描波状文を施す甕口縁部である。５は櫛目の残るナデを施した甕口縁部である。６はいわゆる「Ｓ字状口縁甕」の口縁部である。７は甕の底部である。８は一部に刃部を作り出している。９は黒曜石製の石鏃である。本址はこれらの出土遺物より、古墳時代前期前半の所産時期が考えられる。



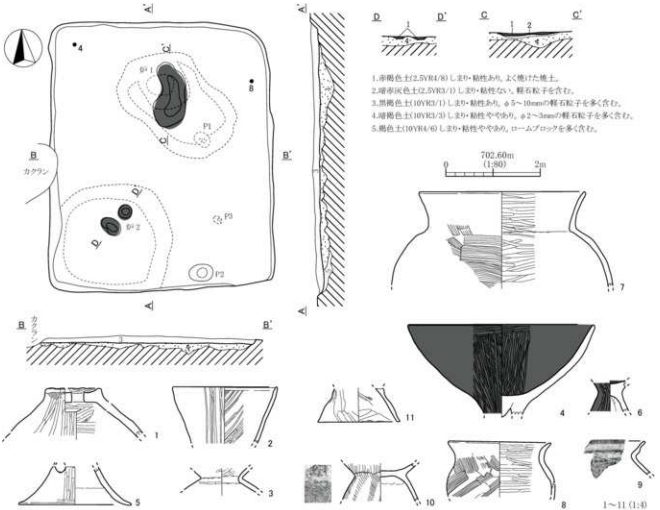
第４図　Ｈ１号住居址及び出土遺物実測図

（２）Ｈ２号住居址

本址はエ・オ-4・5・6Grに位置する。残存状態は良好で、形態は長方形である。規模は南北長5.49m、東西長4.50mを測る。壁高さは0.05～0.15mで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－５°－Ｅを測る。床面積は24.41㎡を測る。ピットは３カ所検出され、規模はP1が径0.36m・深さ0.41m、P2が径0.50m・深さ0.19m、P3が径0.19m・深さ0.19mを測る。床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.02～0.30mを測る。住居掘り方は南東コーナーと炉下に土坑状の掘り込みがあった。炉は２か所確認された。いずれもよく焼けていた。

本址からの遺物は覆土を中心に出土し、11点を図示した。１は蓋である。天井部に焼成前の穿孔がある。２と３は小型丸底壺の破片である。いずれも胎土はよく精錬されている。４～６は高坏で、４と６は赤彩が施されている。５は脚部に円形の穿孔があり、器台の可能性もある。７と８は甕である。いずれもハケ目の残るナデを施す。９と10はＳ字状口縁甕の一部である。いずれも胎土が白色を呈する。11は台付甕の脚部である。脚部の付け根に砂粒を混入した「補充技法」が用いられている。

本址はこれらの出土遺物から古墳時代前期前半の所産時期が考えられる。



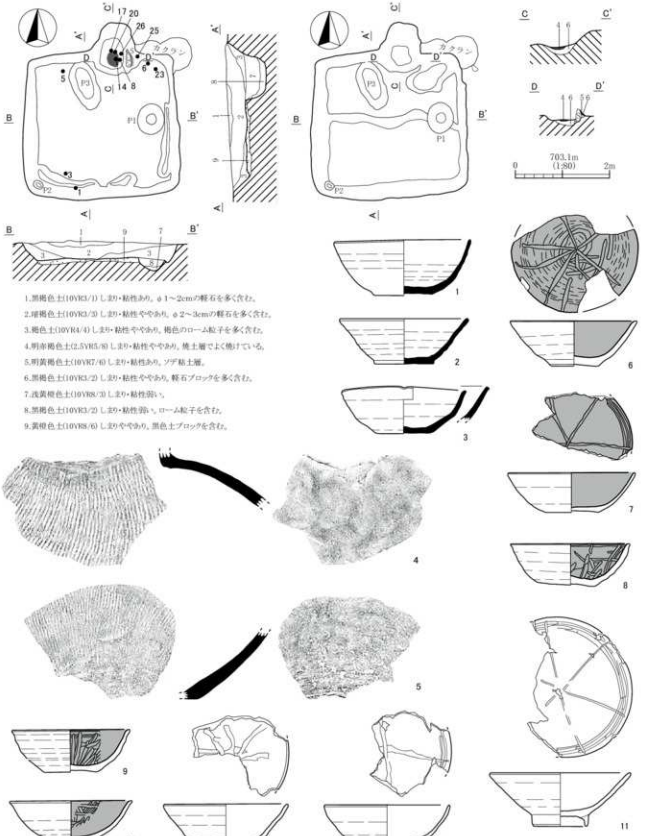
第５図　Ｈ２号住居址及び出土遺物実測図

（３）Ｈ３号住居址

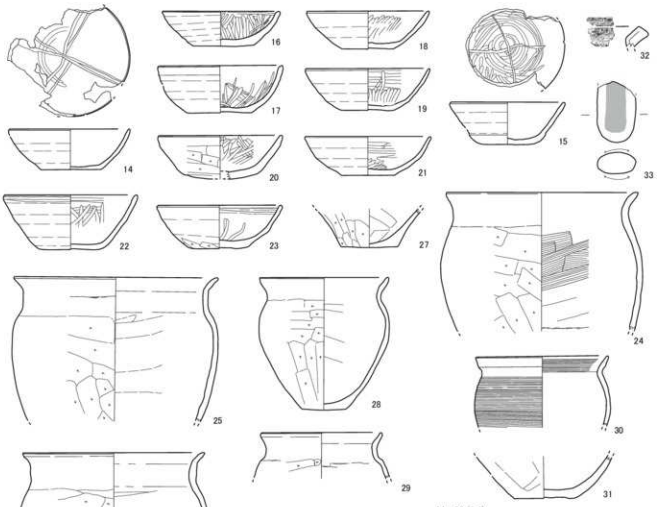
本址はエ・オ-2・3Grに位置する。残存状態は良好で、形態は方形を呈する。規模は南北長2.56m、東西長2.70mを測る。壁高さは0.27～0.36mを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを測る。床面積は6.43㎡を測る。床は全体に硬質で、貼り床は0.05～0.12mの厚みであった。住居掘り方は南側が一段深くなっていた。カマド脇に貯蔵穴と考えられる掘り込みとピットが２ヶ所検出された。カマドは北壁中央部に構築されていた。袖部は粘土と自然礫により構築されていた。火床部はよく焼けていた。

本址からの出土遺物はカマド周辺より多く出土し33点を図示した。１～３は須恵器坏である。いずれも焼成が弱い。４と５は須恵器甕である。いずれも外面に平行タタキが施されている。６～10は土師器坏でいずれも内面黒色処理が施されている。11は土師器碗である。12～23も土師器坏である。14と15は内面見込み部に「十」の暗文が施されている。その他は丁寧なミガキが施されている。20と23は底部外面と体部下半にヘラケズリを施している。特に20は他の土師器坏に比べると器厚があり、いわゆる「相模型坏」のような様相を呈している。24～27は土師器甕である。25と26は頸部が「コ」字状に屈曲する「武蔵甕」と呼ばれるタイプの甕である。28と29は小型の土師器甕である。29は「武蔵甕」と呼ばれるタイプの甕である。30は土師器ロクロ甕で、小型であるが口縁部が特徴である。32は土師器甕の口縁部で、特徴より「甲斐型甕」と考えられる。33は磨り石である。

本址はこれらの出土遺物から９世紀後半に位置づけられる。



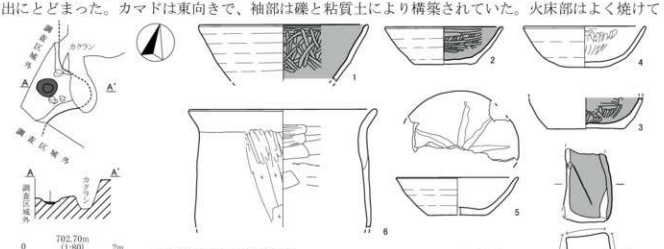
第６図　Ｈ３号住居址及び出土遺物実測図



第７図　Ｈ３号住居址出土遺物実測図

（4）Ｈ４号住居址

本址は調査地西端のク−5Grで検出された。住居址のほとんどが調査区域外となり、カマドのみの検出にとどまった。カマドは東向きで、袖部は礫と粘質土により構築されていた。火床部はよく焼けて



第８図　Ｈ４号住居址及び出土遺物実測図

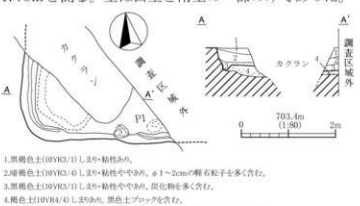
いた。

本址からの出土遺物は比較的多く、７点を図示した。１～５は土師器坏である。いずれも内面にミガキを施す。５のみ内面見込み部に放射状の暗文を施す。６は土師器甕である。７は３面の砥面が確認できる砥石である。本址はこれらの出土遺物から９世紀後半代に比定される。

（５）Ｈ５号住居址

本址は調査地東端のイ・ウ－３Grで検出された。残存状態は住居址のほとんどが撹乱により削平されていた。形態は不明で、床面積は検出部分で1.76㎡を測る。壁は西壁と南壁の一部のみであった。床は軟質で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘り方時に検出されたP1の規模は径0.29m、深さ0.28mを測る。床は軟質で、0.08～0.22mの厚みで貼られていた。

本址からの出土遺物は赤彩された壺破片やＳ字状口縁甕の破片があったが、いずれも小片で図示できなかった。本址の帰属時期は不確実だが、これらの出土遺物からＨ１・２号住居址と同時期と考えられる。



第９図　Ｈ５号住居址実測図

２．土坑

（１）Ｄ３号土坑

本址はエ－２Grで検出された。形態は不整形で、上部が削平されていると考えられる。規模は長軸長2.02m、深さ0.09～0.15mを測る。一部に焼土が検出された。本址からの出土遺物は土師器甕片が出土したが、小片であり図示できなかった。本址の帰属時期は不明である。

（２）Ｄ４号土坑

本址はキ-6Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長2.23m、深さは0.73mを測る。本址の底面は凹凸があり、西側で一段深く掘り窪められていた。本址からの出土遺物は土師器坏片・甕片、灰釉陶器片、近世陶磁器片があったが小片であり図示できなかった。本址の帰属時期は覆土の状況より近世以降と考えられる。

（３）Ｄ５号土坑

本址はエ-3・4Grで検出された。形態は楕円形で、規模は長軸長0.78m、短軸長0.69m、深さ0.24mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

（４）Ｄ６号土坑

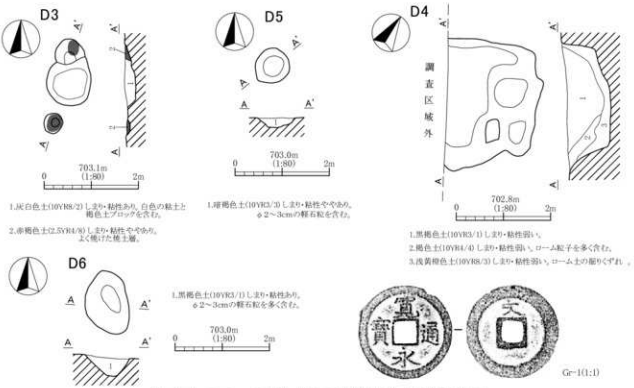
本址はウ・エ-3Grで検出された。形態は不整形で、規模は長軸長1.38m、短軸長0.91m、深さ0.53mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

３．ピット

今回の調査では４ヵ所の単独ピットを調査した。ただ、調査区が限られた範囲であるため、掘立柱建物址の一部やそれに関係するであろうピットは把握できなかった。規模はP1が径0.42m・深さ0.26m、P2が径0.34m・深さ0.37m、P3が径0.51m・深さ0.46m、P4が径0.31m・深さ0.20mを測る。

第Ⅲ章　調査の総括

今回の調査地は215㎡という狭い範囲であったが、一つの大きな調査成果が得られた。本章ではその事に触れ調査の総括としたい。



第10図　Ｄ３～６号土坑及び遺構外出土遺物実測図

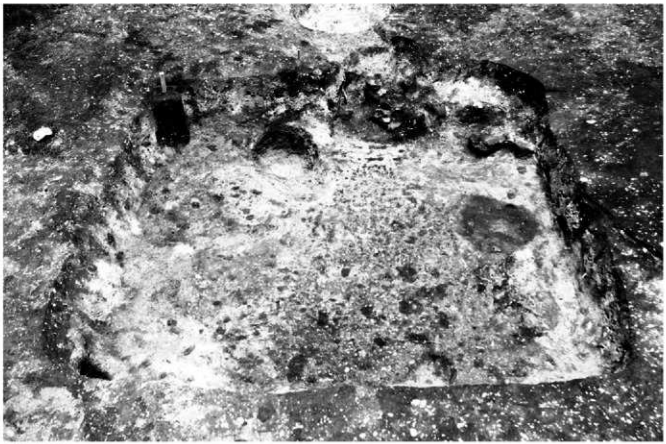
今回の調査では、弥生時代末～古墳時代初頭に位置づけられる竪穴住居址が３軒発見された。野馬窪遺跡群内において当時期の遺構は初の検出となる。ただ、いずれの住居址も出土遺物が少なく確実な時期比定は難しいが、出土遺物があったＨ１号住居址とＨ２号住居址からは、弥生後期の箱清水式土器はほとんど出土していない。唯一のものとしてＨ１－４の甕が箱清水式と捉えられる。なお、Ｈ２－４の高坏は赤彩が施されているが、器形的には箱清水式からはずれる器種と考える。その他の特徴的な器種としては、Ｈ１－６やＨ２－９．10のＳ字状口縁甕がある。いずれも特徴からいわゆる「Ｂ類」と呼ばれる形態である。Ｈ１－１，３とＨ２－２．３は小型丸底壺と考えられる。

以上のように土器の様相からこれら遺構は古墳時代前期中葉と捉えられ、佐久では希少な時期の遺構といえる。今回の調査事例も含め、当該時期の遺構が湯川流域に沿って分布する傾向があることが旧来より指摘されていたが、今回の調査もその点を追認した形となった。

以上雑駁ではあるが、今回の総括としたい。

調査区全景（東より）

図版１

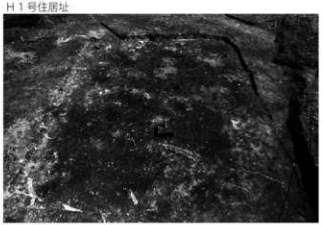


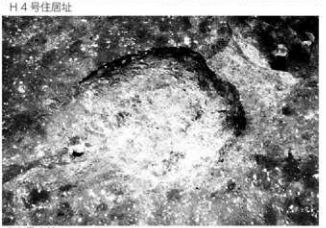
Ｈ３号住居址

Ｈ３号住居址カマド

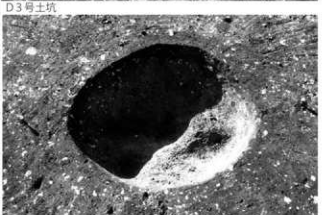
Ｈ１号住居址

Ｈ４号住居址


Ｈ２号住居址


Ｄ３号土坑

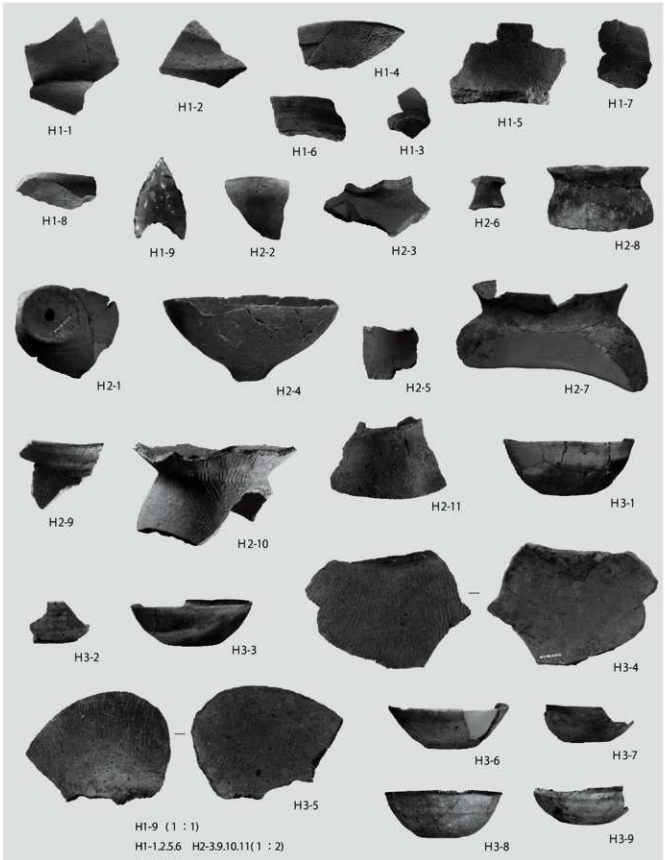
Ｈ５号住居址


Ｄ５号土坑

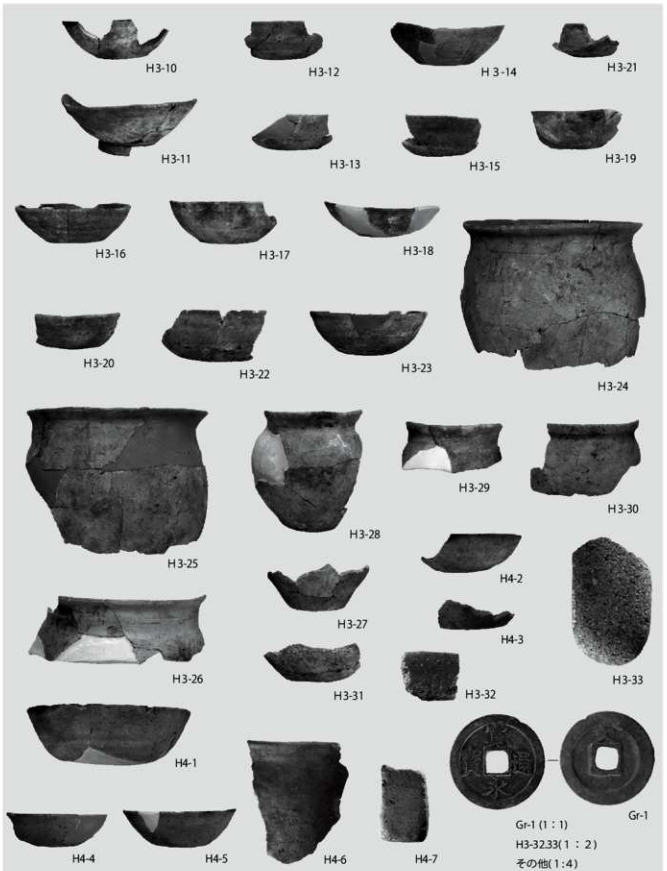
Ｄ４号土坑

表土剥ぎ状況

図版 3



H1-9 (1 : 1)
H1-1.2.5.6 H2-3.9.10.11(1 : 2)
その他(1 : 4)


H3-10
H3-12
H 3 -14
H3-21
H3-11
H3-13
H3-15
H3-19
H3-16
H3-17
H3-18
H3-24
H3-20
H3-22
H3-23
H3-29
H3-30
H3-25
H3-28
H4-2
H3-27
H4-3
H3-33
H3-26
H3-31
H3-32
H4-1
Gr-1
H4-4
H4-5
H4-6
H4-7
Gr-1 (1 : 1)
H3-32.33(1 : 2)
その他(1:4)

報告書抄録

ふりがな	のまくぼいせきぐん のまくぼいせきはち
書　名	野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅷ
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第305集
編著者名	冨沢　一明
編集機関	佐久市教育委員会　社会教育部　文化振興課
所 在 地	長野県佐久市中込2913　TEL0267-63-5321　FAX0267-63-5322
発行年月日	2024年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
のまくぼいせきぐん 野馬窪遺跡群 のまくぼいせきはち 野馬窪遺跡Ⅷ	さくしさるくぼ 佐久市猿久保 181-1	20217	122	36°15	138°29	20230516 ～ 20230601	215	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野馬窪遺跡Ⅷ	集落跡	古墳 平安	竪穴住居址　5軒 土　坑　　4基	土師器　須恵器 石器　古銭	

要　約	湯川を望む台地上を発掘調査した。その結果、周辺部の調査事例を補強する弥生時代末から古墳時代初頭と平安時代のそれぞれの集落跡の一部を発見した。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第305集
野馬窪遺跡Ⅷ
2024年　3月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
社会教育部　文化振興課　文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込2913
℡0267-63-5321
印刷所　　キクハラインク有限会社